

田耕旭氏(高麗大学教授・高麗大学民俗学研究所所長)は「韓国の祭祀芸能における身体技法 韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法」のテーマで話され、韓国の仮面劇はもともと祭祀の場で演じられてきたものが時を経て変化したものであり、仮面劇に登場する人物の動きは招福を象徴する動きとして手を振る動き、セクシャルな動き等がある。また除災を象徴する動きとして、疫神のシシタクタギがソメを取り戻す動き、また五方神將の手を挙げ踏み足をし回転する動き、柳の枝等を用いて悪の象徴を逐いやる動きがあるとされた。

大谷津早苗氏(昭和女子大学助教授)は「人形に見る身体技法 日中の比較から」のテーマで話された。本来宗教性を色濃くもつ三番叟が人形あやつりの演目にも取り入れられ、その動作から読み取ると、足を踏む事、

目が反り返り口を開き表情を変える事や赤い顔が用いられる事は悪霊を払う意味があり、天を仰ぐ動きも宗教的な動きに繋がるとされた。

以上パネリストの発表から、動きの中から読み解く時のキーワードは除災と招福ではないかと思う。災いを祓い清め福を招くための動きが重要である。もちろん中国のヤオ族の動きには道教の影響が伺えるが、本来人類には不孝をもたらすものに対する恐れがあり、それを無くそう祓い清めようとするために様々な動作を案出したのではと考える。一方でこうあれかしと幸福を招こうとする動作も忘れてはならないと考える。これらの動きは人類文化に記憶され、その記憶はアジアを超え広い地域に共通すると考える。(廣田)

## セッション 民具と民俗技術

「民具」とは、日本常民文化研究所の創立者でもある渋沢敬三によって創出された概念である。「道具」とは機能面からみた呼び方だが、各国・各地で長い歴史のなかで使われてきた道具には、その地の風土や民俗・歴史それに民族性が染みついていて、この機能以外の付帯情報を重視した場合が「民具」であり、その民具を使いこなしてきた伝統的技術が「民俗技術」である。これらはともに非文字資料として、文字に記録されなかった諸民族の歴史情報の宝庫であり、これらの国際比較を通して、大規模な民族移動をともなって生成されてきた東アジア世界の歴史と民俗に迫ろうとするのが、このセッションの目的であった。

周星氏(愛知大学教授)は、「中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか」と題し、中国の研究は民芸品の芸術的価値を重視する傾向がよいが、近年の高度成長のなかで庶民の普通に見られた道具や器が急速に工業製品に置き換わる中で、「民俗文物」に関する関心が高まり、「民具」という言葉も使われはじめていることを指摘し、今後、民俗学界も口承文芸や民間文学のみならず民具にも目を向けるべきこと、歴史文献の考証にとどまらずフィールド調査を重視すべきこと、東アジアの比較民具研究を活発にすべきことを提起した。

尹紹亭氏(雲南大学教授・人類学博物館館長)は、「中国の犁の起源・形態とその分布」と題し、E・ヴェルトの西北インド起源犁の中国伝来説を批判して、中国には長江下流域では5000年前の石犁が大量に出土していること、

その地の在来犁はインド犁には似ていないことを上げて中国犁は中国起源とした。また雲南省のフィールド調査をふまえて、中国の犁を 大四角枠曲轆犁(長江中下流域) 無犁柱長轆犁(甘肅~雲南省) 四角枠長直轆犁(陝西~雲南省) 三角枠長直轆犁(西南・華南・中南) 三角枠曲轆犁(西南・華南・東南アジア)に5分類し、これらの犁型は民族移動と環境に対する適応の結果だと報告した。

高光敏氏(済州大学博物館学芸研究員)は、「排泄の民俗と民具 済州島・韓半島・舟山島の比較」と題して、生産ばかりを重視してきた研究動向に問題ありとして、環境問題とも関わる排泄を正面から取り上げて韓国・中国の比較を試みた。済州島は韓国でありながら中国的なトイレと豚小屋一体型であり、南海島ではトイレ・豚小屋・堆肥場は別で、下肥は背負い樽で運んで麦畑に施肥した。中国の舟山島では、トイレの糞桶、夜は夜桶にためた糞尿を畑に運んで糞糞で熟成させて施肥していると報告した。

コメンテーター近藤雅樹氏(国立民族学博物館教授)は、渋沢敬三の民具研究は民芸運動を展開した柳宗悦との対比でより鮮明になる。尹氏の報告は犁以外の民具・民俗技術のセットごとの比較でより豊かになろうと指摘した。安室知氏(国立歴史民俗博物館助教授)は、等閑視されてきた排泄民俗が取り上げられたことを評価し、生業や食文化の研究とともに今後の重要な研究課題であり、東アジアの物質文化研究の発展が期待されると指摘した。(河野)